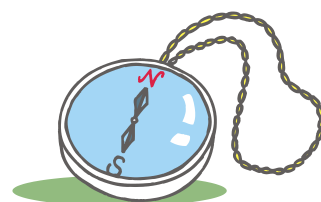


羅 針 盤

第 11 号

令和8年7月13日（月）



◆ 6月23日「沖縄全戦没者追悼式」より

先月の6月23日、沖縄では、第二次世界大戦末期の沖縄戦の犠牲者らを悼（いた）む「慰霊の日」を迎えました。日米両軍による地上戦が展開されたという沖縄戦から81年の月日が経過し、最後の激戦地となった沖縄県糸満市の摩文仁（まぶに）にある平和記念公園では、「沖縄全戦没者追悼式」が営まれました。たくさんの住民を巻き込んだ激しい地上戦の末、20万人以上もの人たちが亡くなり県民の4人に1人が命を落とした昭和20年の沖縄戦。追悼式の式典では、児童生徒を代表して、沖縄県豊見城（とみぐすく）市立豊崎中学校2年生の亀谷琉奈（かめやるな）さんが書いた曾祖母の戦争体験をもとにした平和の詩「生きたいと願った証（あかし）」が朗読されました。（全文を掲載します。）亀谷さんが5歳の頃、家族で食卓を囲んでいた時に、曾祖母の右太ももに傷があることに気がついて、「この傷どうしたの」と尋ねてみると、いつも笑みを絶やさない曾祖母の顔が見たこともない暗い表情となり、曾祖母が涙ながらに戦争体験を語ってくれたそうです。戦時中、曾祖母は石垣島から島外へ疎開していましたが、疎開先で空襲に遭い、恐怖や不安から、右手に握った石で何度も自分の右足を引っ掻いて、傷つけたと。悲惨な歴史を経て、今という平和な時があることを、「慰霊の日」に沖縄の人々が振り返るのと同じく、私たちもしっかりと顧みる時間を持つ必要があるはずです。



「生きたいと願った証（あかし）」

沖縄県豊見城市立豊崎中学校2年 亀谷琉奈

あの日の沖縄には 青い海も 優しい風もなかった 空は黒く 地面は揺れ 人々の叫び声が絶えなかった 爆撃の音が 心まで壊していく まだ若かった曾祖母は 小さな体で必死に走った 血だらけの道を 倒れた人たちの横を もう動かない人を見ながら 涙を流す暇もなく ただ生きるために そして 愛する夫の命を案じながら 「お願い 生きていて」 その想いだけを胸に 足がもつれても 呼吸が苦しくても 転びそうになっても 前へ前へと走った しかし その願いは	もう二度と届かなかった その時のことを話す曾祖母の声は 今でもとても優しい でも 私は知っている その優しい声の奥に 今も消えない悲しみがあることを 細い足 しわしわの手 小さな背中 長い年月を生きてきたその姿を見るたび 私は戦争の重さを感じる そして 曾祖母の右足には 今も傷が残っている それは 戦争中 自分で引っ掻いた傷 灰色の空の下 爆撃の音が鳴り響く 恐怖と不安でいっぱいになり 右手に握った石で 自分の右足を何度も何度も引っ掻く 気づけば手も足も血だらけだった 私が真実を知ったとき 胸が締めつけられた どれほど怖かっただろう	どれほど苦しかっただろう 生きたい 死にたくない その想いだけで 曾祖母は必死に生き延びた 戦争は人を傷つける 体だけじゃない 心まで壊してしまう 家族と笑う時間 友達と過ごす日々 「また明日ね」と言える幸せ そんな当たり前を 全て奪ってしまう でもそれは 当たり前なんかじゃない 血と涙の中を生き抜いた人たちが 命を繋いでくれたから 今の私たちがいる もし曾祖母が あの日 走っていなかったら もし あの日 命を落としていたら 私はここにいなかった 曾祖母の右足の傷は ただの傷じゃない	「生きたい」と強く願った証 「戦争は二度としてはいけない」 という叫び 私はその想いを これから先も伝えていく もう誰にも 血だらけの道を 走ってほしくないから もう誰にも 愛する人の命が奪われることに 怯えてほしくないから もう二度と 沖縄の空を戦争で 染めてはいけないから 平和は当たり前じゃない たくさんの人の涙と苦しみと 「生きたい」という願いの上にある だから私は忘れない 沖縄戦で苦しんだ人たちを 愛する人を守ろうとした想いを 泣きながら生き抜いた人たちを そして 曾祖母の右足の傷を 「生きたい」と願った証の傷を 平和な未来へと繋いでいくために
--	---	--	---